

## 要旨

### 目的

NICU に入院直後の重篤な状態の子どもをもつ両親とのコミュニケーション場面における看護師の体験を、看護師の感情に注目して明らかにする。これにより、両親とのコミュニケーションを困難に思う看護師への支援、コミュニケーションの質の改善、看護師のバーンアウトの予防への示唆を得る。

### 方法

質的記述的研究。NICU 経験年数 2 年目以上で、入院直後の重篤な状態の子どもをもつ両親と複数回関わった経験がある看護師 5 名を対象に、半構成的インタビューを実施。アルバート・エリスの ABC 理論を分析の枠組みとした。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施（承認番号：16-A042）。

### 結果

入院直後の重篤な状態の子どもをもつ両親とのコミュニケーション場面において、NICU の看護師は【困惑】、【不安】、【やるせなさ】、【落胆】、【焦り】、【恐怖】、【緊張】、【悲しみ】、【驚き】、【辛さ】、【気まずさ】、【諦観】、【落ち着き】の感情を抱いていた。この感情の中でも、すべての看護師が【困惑】を抱き、ほとんどの看護師が【不安】を感じていた。【困惑】と【不安】が生じた背景には、子どもが NICU に入院直後では両親と関係性が築けていないこと、自分にとって突然や予想外・初めての状況であること、子どもが亡くなる可能性が高く時間的猶予がないこと、両親の意向が不明確であること、といった状況が共通してみられた。また、看護師のもつ“死生観”と「なにかしなくては」という“使命感”により、コミュニケーション場面で生じる感情、行動に違いがみられた。死に対する否定的なイメージが強い死生観をもっている看護師は、コミュニケーション場面において多くのネガティブな感情を抱いていた。さらに、「なにかしなくては」という使命感の強い看護師は、状況を落ち着いて眺めることが難しく、ネガティブな感情を抱く傾向がみられた。

### 結論

入院直後の重篤な状態の子どもをもつ両親とのコミュニケーション場面において、NICU の看護師は主にネガティブな感情を抱いていた。その背景には、出生直後から子どもの死を予期して両親と関わる、NICU という場における状況の難しさがあった。また、看護師が抱く感情は、自身のもつ“死生観”や「なにかしなくては」という“使命感”にも影響を受けていることが考えられた。